
流れ流れ、咆える！

Suerte

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ流れ、咆える！

【Nコード】

N4419S

【作者名】

S u e r t e

【あらすじ】

神のミスでもなく、事故でもなく、かと言って自然死でも、病気でなく。

ただ、いつの間にか異世界に転生した青年の物語。

彼はこの地で、何を成す。

・・・と、かつこよく？書きましたが、ゆるーくいきたいですw

1 彼は如何して生まれたのか

突然だが、本当に突然だが、俺は、転生者だ。

こんな話をして、信じる奴はいないだろう。

転生など宗教か、でなければ、漫画や小説やゲームの中の話なんだから。

他人にそんなことを言ったところで、現実とファンタジーの区別もできない馬鹿と笑われるか、

酷ければ、無言で通報ボタンを押されるかもしれない。

だが、だが、それが、実際に起こったんだ、仕方ないだろう？

はじめは何かの夢だと思ったさ。

俺は別に病気だったわけでも、死ぬような年でもなかった。

かと言って、なら事故にあったのか、それも違うんだよ……。

ただ、いつも通り、学校が終わって家に帰り、パソコンでゲームをし、

小説を読み、予習と復習して寝た。

な？ 実に平凡だろう？ どこにも転生につながる要素なんて無い！

……ところが、だ。

目がさめたらドッコイ！、俺は見知らぬ天井を見上げてたってわけだよ。

そして、俺を覗き込む金髪の女性。

そして、その横に、強面のおっさん。

当然ながら知らない顔だ。

彼女いない!!年齢の俺だ金髪の、それも飛びきりの美人を知っているわけが無い！

強面のおっさんも同じだ。

……言ってて悲しい……。

だが……正直、ここまでは、俺が寝てる間、何らかの理由で意識を手放して、

運ばれた病院の看護婦さんとお医者さんだと思っていた。

いや、思いたかったよ……。

後から思つと、どうして看護婦などと思つことが出来たのか。

当事者の俺も悩んじまうくらいおかしい考えだったのだが。

だが、友よ！、目覚めてイキナリ、見知らぬ場所だぜ？

現実逃避ぐらい許してくれ。

それによ……、そんな俺の現実逃避も、あっさり終わっちまったんだよ……。

「！@#\$@\$\$##\$%ゝ！！！」

「！@#\$^%\$\$%\$%ゝ！！！」

…目の前の、俺を覗き込んでる女の人とおっさんが（後で母と、父だと知ったよ）が、

俺がまったく聞いた事も無い言葉で俺に語りかけて来たときにな…。

「ライルちゃん！ボーっとして どうしたの？」

母さんがあの時と同じように、笑顔で俺を覗き込んでくる。

金髪が少し揺れた。

いかん、見惚れちまった！

……相変わらず今年で35になる人とは思えねえぜ。

外見も性格も若すぎるよ、母さん……。

未だに母さんを狙う奴らの気持ちがわかる気がしてきた……。

もつとも、俺と親父の鉄壁ガードが、守っているがな！

「あー！、ライルちゃん……またお母さんの年のこと考えてたんでしょー！」

笑顔から一転、頬を膨らませ言う母さん。

うおー！やばい！、……うちの母さんは、年の話をされるのを嫌がる。

俺や親父がすっかり口になると、今見たく目に若干涙を浮かべ、頬を膨らませ声を上げるのだ……。

まだまだ、気にする事ない年なのに……。

母さん曰、女の子は皆、若老にかかわらず、気にしている物らしい。

そうして、自分にいつも気を配り美しさを保とうと努力する事こそ、女を女たらしめているのだ。

と、力強く言われた、それはもう、殺気さえ感じられるほどに。

そして、今、目の前で頬を膨らませている母さんの外見年齢は23
ほど、

……はつきり言って・・・やばい、可愛い。

マザコンになりかける……ハッ!? しっかりしろ、俺! 駄目だ駄目
だ!

色即是空! 空即是色!、喝!!

……よし落ち着いたぜ……!

「もぉ! 何とか言っておお!……そんなこと考えるライルちゃん
は……こうだ!」

だが、母さんは、そう言う……。

むにゅん

俺の頭を両手でロックし……自分の胸に押し当てやがった。

……ぐおああああ?!!

な、なな、な?!

俺の精神を、こつも簡単に乱すだとお？！

何と言う凶器だ……！

意識が追いつかない。

顔が熱い、そして恐らく俺の顔は真っ赤だ！

「どうだ〜まいったか！、母さんは、まだ若い！若いのお〜！」

そして、そんな俺などお構い無しに、母さんはそついいながら

さらに強く俺の頭をその凶器で締め付ける。

い、いかん！、このままでは……いろいろな意味で死ぬ……！！

「わはってる！、わはってるかは！このままだと死ぬって！、ギブギブ！」

それは、もう、必死で謝つたさ！

前世の友人のうち一人が、女の巨乳に顔を埋めて見たいと言っていたが……。

これは、精神的にも肉体的にもきつ過ぎる！

……いやね？気持ちよかつただけどさ……。

「くおらああアア！！、ライルウウウ！！人の嫁と……イチャつくんじゃあ……ねえええええええ！！」

ドゴオオオオオオオオオ！

「いつてえええええ！？」

突然の衝撃に声を上げ、地面を転がる俺。

あ、頭が砕ける……！！

（まったく……誰だよ?!）

怒りながら起き上がるとそこには、

「誰って……ハルケギニアーの伊達男にして！愛しの我が妻ミリアのただ一人の旦那にして！

我が馬鹿息子、つまりお前の！素敵で格好いいお父様である、グラントたあ俺のことよお！」

親父がいた……相変わらず暑苦しい。

と言うか、いきなり息子ぶっ飛ばしてそれかよ?!冗談じゃねえ！

後、心を読むな。

後、誰がバカだゴルアア！

「おい、親父！、これは何のつもりだ？、ああん？！」

怒りを乗せて叫ぶ、最近家に帰ってこないと思ったら

拳をプレゼントとはなんだよおい！

「うるせえ！お前が、人の嫁とイチャつくからだろーが！ミリアは俺のだ！」

おい、嫉妬かよ！嫉妬で久しぶりに会った息子をぶん殴ったのかよ！

大体アレのどこがいちゃついてたって言うんだ、アレはただの……、

いちゃついてるように見えなくてもないな、ウン。

母さん年に比べ若すぎるんだよ……。

だが、だからってなア！……。

「息子の頭を……ただの拳でもなく錬金で作った鉄製ガントレットで固めた拳で殴る親がいるかあああ！」

ドゴオオオオ！！

「ぎゃあああ！！！」

フウ、殴り返してやったぜ！

スクエアの土のメイジが、本気で錬金で作った物で、

殴るなよ、まったく……ただでさえ馬鹿力なのに！

……ああ、そう言えば、紹介が遅れたな。

俺の名は、ライル、フルネームは、ライル・ド・レイネスト。

母さんの名はミリア、フルネームは、ミリア・レンハールト・ド・レイネスト。

親父の名は、グランツ、フルネームは、グランツ・ファーレン・ド・レイネストだ。

この名前で解ると思う。

そう、俺が転生したのは、ゼロの使い魔の……トリスティン王国の、存在しないはずの……レイネスト伯爵家だ。

1 彼は如何して生まれたのか（後書き）

こんにちは、S u e r t e です。

皆様の名作 s s に触発され、未熟ながら筆を執りました。

未熟なりに楽しんでいただけるように頑張りますので、

よろしくおねがいます。

アドバイス、指摘等よろしくお願いします。

・・・・・・あまりに厳しいと、泣きます。

男ですがwでは、またお会いしましょう。

4月14日、少し内容を追加して、修正を加えてみました。

4月16日修正2です。

ごめんなさい、2話は書いては消すを繰り返してます・・・・。

グランツさんはっちゃけましたww

寡黙な人の予定だったのにw

2話、日常そして初陣の予感？

「まさか殴り返されるとは……イテテッ」

「当たり前この馬鹿！……くうう……」

「もう、二人とも！喧嘩は、めっ！だからね？」

オッス、前回の最後を馬鹿親父との殴り合いで終えたライルだ。

あのと、横で見ていた母さんに二人とも説教を食らってしまった。

それも、ただの説教じゃあない……正座しての説教だ。

ただでさえ殴られた所が痛いのに、足の痺れにまで耐えなければならぬなんて、

地獄以外の何者でもなかったよ……。

腰に手をあて怒る母さんは何と言うか若く見えることもあって、

可愛かったんだが、少しでも視線をそらせば、すかさず雷が落ちた。

普段のほほんとしてるから、こういうときは怖いんだよね……。

ウン、やっぱり母さんは怒らせちゃ駄目だ、これは間違いない！

「それはそうと、あなた お仕事はもう終わったの？」

「ああ、もう大丈夫だと思うぜ？、徹底的に叩いたんだ、もう当分は襲ってこねえだろうよ！」

と、考えていると、スツカリいつも通りの雰囲気に戻った母さんが、親父と話していた。

久しぶりに会えたからか、二人とも満面の笑顔だ。

と言っても、3日ほどなんだがこの熱々夫婦には30年くらい経ったように感じるんだろう。

まったく……結婚して、もう10年だったのにねえ……、ま、夫婦仲がいいのはいい事だ。

みてる楽しい夫婦だし。

さて、親父が家を空けることになった理由、それはレイネスト領内の村の一つを、

オーク鬼が襲撃してきたからだ。

オーク鬼と言うのは、巨大で知能が低く集団性があり、おまけに人を食う化け物だ。

まあつまりは、一般的なファンタジーのオークその物ってわけさ。俺は、まだ見た事は無いが、多分想像通りの姿なんだろうなあ。

だが、ここで一つ疑問ができた。

「だが親父、オーク鬼を相手にしたにしては、時間が結構掛かったな何かあったのか？」

これが、俺の疑問だった。

親父は身内だから言うわけじゃなく純粹に強い。

土のスクエアメイジなんだから強いのは当たり前かもしれないが、

親父は土メイジの中でも特に強い。

その理由は親父の思考にある。

親父は、魔法こそ全てと言う考えを持っていない。

魔法が幾ら強くとも、接近されれば弱く、魔力が切れたら何もできない、

だから魔法を過信してはいけない。

魔法だけでなく、体も鍛え、あらゆる状況に対応できなければ、

魔法が使えなくなったとき成すすべなく死んでしまう。

これが親父の、そしてレイネスト家の考えだ。

なので、親父はメイジと思えないほどのマッチョである、それはもう見事なまでに。

それもただのマッチョじゃあない、イケメンのマッチョなのだ！

そして、そんな親父の戦闘スタイルは、やはり鍛え抜かれた体を生かした接近戦。

そうだ、メイジなのに接近戦が大得意なんだよ、ウチの親父は。

しかもただの接近戦じゃない、冒頭みたく、心血を注ぎ錬金した鉄で作ったガットレットをつけて、殴るんだ。

だからついた二つ名が、ずばり、鉄拳、実に親父らしいぜ……。

アレは、本気でやったら鉄塊も砕くだろうな……。

とまあ、長々と語ったわけだが、要約すると、親父は凄く強いって事だ。

で、今回オーク鬼の群れが現れた村は、ウチの屋敷から相当近い。

馬車で精々1時間も揺られてれば到着だ。

それに、村を襲うオーク鬼の群れは大体はあまり大きくない。

精々10匹来れば多いほうだ。

奴らは頭が悪いから、人間を舐めきっている。

だから、村一つ襲うのに大きな戦力は使わない。

それにだ、親父は一人で村に向かったわけじゃない。

何人が親父の部下を連れて行ったんだ。

オーク鬼一匹が、手馴れの戦史任に匹敵するとはいえ、親父は土のスクエア。

部下の人たちも全員何らかの系統の、ライン トライアングルのメイジだ。

たがだかオーク鬼十数匹倒すのに、3日も掛かるとは思えない。

「それがなあ、奴ら、50匹以上来やがったんだ

小さい村を襲うのに50も来るとは思ってたくなってな

少数で行ったら、ちと遅れちまったぜ！」

「おいおい、なんだよその数は！
多すぎるだろうそれ、親父無事だったのか？」

幾らなんでも数が多すぎるだろ？50ってなんだよ50って！

何で、村一つ襲うのにそんなに来るんだ！

「ハッ！、俺様を誰だと思ってやがる！、グランツ様だぜ？

オーク野郎の100や200、問題ねえよ！」

そう言つて、豪快に笑う親父。

はは、心配するまでも無い、か。

まあ、親父を倒すなら……かの烈風さんを連れてくるか、

……母さんの、”あなたなんか大嫌い！”攻撃しかないだろうなあ。

……後者が情けなすぎるぜ……。

今日もレイネスト家は平和だった。

だが、俺はこの後起こることなど、予想もできなかった。

まさか、俺の初陣の時が迫つてるとはねえ……。

2話、日常そして初陣の予感？（後書き）

いかがでしたでしょうか。

第2話です。

消してはかき消しては書きを繰り返し、

やっと投稿できましたw

最後にあるように次話、つまり3話から6話ぐらいまでは、

戦闘になりそうですw

また投稿速度は亀になると思いますが、ゆっくりと待っていてくだされば幸いです。

それでは、読んでくださって有難うございました。

閑話1、彼の鍛錬風景

親父が帰ってきた次の日、俺は庭で土で作られた親父特製の案山子を相手に、一人鍛錬をしていた。

ウチの庭、結構広いから鍛錬場所には困らなくていいねえ……。

「せいっ！はっ！ふっ！」

バコッ！ドコッ！バコオオ！

目の前の案山子めがけて、大きく踏み込み、顔面左ストレートから頭への右フック、そして、顎への左アッパーへとつなげる。

硬い。だが、手ごたえは十分！

「はあ……っ！」

ドコオ！

続けて、左アッパーの体制から腕の角度を変え、拳を案山子の頭上に振り下ろす。

チョップングレフト、とでも言おうかね。

今の一撃で案山子の首の部分が折れたのか、だらりと下がった。

「フウッ……！」

息を短く吸い込み、バックステップで後ろに大きく下がる。

案山子と俺の距離は……恐らく2メートル弱！

「慣らしは……終りだア！」

ダダダッ！、ドコオオオ！

叫びと共に前へとダッシュ、一気に案山子に迫りそのまま、

左拳でだらりとしている案山子の顎にアッパーを入れ、またバックステップで距離を取る。

だらりと下がっていた頭が、今度は後ろのほうに曲がってしまった。

距離は、またも2メートル弱。いや、ここじゃあ2メートルだったか？

「クリエイト・ゴーレム！」

そして唱えるのは、土のスペル、「クリエイト・ゴーレム」の呪文だ。

文字通りゴーレムを作る呪文で、俺の一番得意な呪文でもある。

ゴゴゴ……ゴゴ……！

俺が呪文を唱えると同時に軽く揺れる地面。

そして土が競りあがって行き、やがて人の形を作る！

完成したのは一体の石のゴーレム、大きさは大体185CMぐらいだろうか。

俺の背が165CMだから大体それくらいだろう。

ゴーレムは、スツと、俺の傍に並び立つ。

ちなみに、俺は土のラインだ。

10歳でラインなのは結構早いと思う。親父が土のスクエアだから、土の系統はよく伸びるんだよな。

で、ゴーレムだが、原作でギーシュが才人と決闘した時は、青銅のゴーレムを7つ作っていたが、

俺はあえて土で、それも一体だけ作っている。

青銅とかでもできることはできるし、ギーシュより多く出せるが……。

疲れるんだよ、物凄く……。具体的に言うと、精神を召喚したゴーレムの分だけ、

分けるといえいいかな？、そんな感じなんだ。

だから、物凄く疲れる。大事な事なので二回言いました！

もう一つはあまり作りすぎると反応が鈍ってしまつと言う事。

精神を分けるわけだから当然一つの脳で複数のゴーレムに指示を出

さなければならず、

細かい指示を出すとなると、気が遠くなるような数の事を、一つの脳で考えて、

それをこれまた複数のゴーレムたちに正確に指示しなければならな
いんだよ！

どんな地獄だって話だよ……ああそうさ！、ラインになって初めて
ゴーレム作ったとき、

調子に乗って作りすぎたら、指示を出そうとしただけでぶっ倒れた
さ！

だから俺が作るのは一体だけだ。

だがしかあし！、一体だからって舐めて貰っちゃあ困る！

こいつは、俺の最高傑作、そこらのゴーレムとはわけが違う。

まず形、普通ゴーレム、それも土のゴーレムは、

かろうじて人形を保ってるだけの物が大半だ。

だが俺のゴーレムは、ちゃんとした人の、正確にはマッチョマンが、
両手にはガントレットを着け、下半身にのみ鎧を着たような形だ。

そして二つ目の違い、それは！精密さ！

無駄に拘った結果、顔のパーツや表情、そして全身の筋肉に至るま

で、精密に再現されているのだ！

三つ目の違いは、速度。

無駄な装甲をそぎ落とし、素早いスピードを得ることができた。

上半身裸なのはそのためだ。

最後の違いは精密なコントロールだ！

作るゴーレムを一体に絞った事で、どんな指示にも即座に反応し、あらゆる状況に対処できる。

さらに、ゴーレムに母さんの絵を描かせ続ける訓練によって、精密な手の動きを身に着けた。

言うならば、精密動作性Aと言っておこう！

そして、これは違いとは言えないかもしれないが、このゴーレムは、拳の部分が非常に硬い。

これは、このゴーレムがパンチを主力とする接近戦用だからだ。

他の部分の強度は少し低い物の、土ゆえに、速度は少し遅いが回復できる。

こいつを操って、もしくはこいつと共に敵を殴るのが俺の戦闘スタイルだ。

と言っても、まだ実戦に出た事は無いから、どこまで通用するかは

わからないんだけどな。

ちなみに、俺の杖は鉄のガントレットだ。

7歳のとき親父が作ってくれたもので、ガントレットの形を要求したのは俺。

原作でワルドやらなにやらが、剣の形をした杖を使ってたから、ならガントレット形のもいけるだろうと思って頼んだら出来た。

杖が腕と一体化するため、よほどの事がないと奪われる事もないし、指の動き一つでゴーレムに指示を出せる。

そして、他の魔法も、詠唱は必要だが、相手を殴りながら発動可能という優れもの。

杖なのは左手の奴で、右手には杖じゃないけど同じ形の奴を着けている。

親父が作った物なんだ、殴ったら痛いだろうなあ……案山子も凹みまくってるし。

……メイジがこれでいいのかねえ……いいか、親父もアレだし。

ツと、考えが長くなっちゃった。

左手の指で、半分ぐらい壊れかけてる案山子をゆっくりと指差す。

ダッ！

瞬間、ゴーレムが案山子に向かって駆ける。

そして……。

ドドドドドドドドドドドドドドドドコォッー！

目にも留まらないパンチラッシュを受けて、案山子はとろとろ派手にぶっ壊れた。

「やれやれだぜ……」

気分は勿論条 郎だ！、すきなんだよJXJO。

「これにて、今日は終了！」

俺は、壊れた案山子の残骸を片付けて、家に戻った。

閑話1、彼の鍛錬風景（後書き）

いかがでしたでしょうか番外編。

ハイ、番外編ですw

主人公の能力説明でした。

ライルは、バリバリのインファイターです。

作るゴーレムも、近接特化のインファイターです。

殴ります、とにかく殴ります。

だからといって他の魔法が使えなくは無いのですがw

実は、案山子を殴る前に、両脚に重りをつけて庭を走ったりしてます。

ぶっちゃけ、このss、このゴーレムを使った話を書こうと思って
始めましたw

ですので、これから多分接近戦主体です。

それでは、読んで下さって有難うございました。

アドバイス等、お待ちしております。

では！

4月18日内容微修正です。

いまさらですが杖ガントレットは、原作に出てきません。

と言うか、殴り合いをするメイジなんていたら怖いですW

3話、朝の惚気大爆撃と、初陣確定！

その知らせが届いたのは、親父が帰ってから一週間が経った朝のことだった。

その日も俺は、朝食を食べ終えた後、屋敷の庭でゴーレムを使った鍛錬をしていた。

案山子殴りに始まり、ゴーレムをコントロールしながらのランニング。

ゴーレムを使った風景画描きなどなど、挙げればきりが無いメニューをこなし、

汗を拭きながら呼吸を整えていると、親父が庭に出てきた。

「おーおー精が出るじゃねえかライルよお！」

今日もスマイル熱（苦し）いな、親父よ……。

しかもさア……、何で上半身裸なんだよ？！

あんた飯にも、この国の伯爵様だろうが……。

あれか？、とうとう発病したのか？、露出病が。

「言って置くが、俺は露出癖なんて無え！、ただ、俺も朝の鍛錬を

しようと思っただけだ!」

俺の心が伝わったのか、大声で言う親父。

じゃあ、あんたの鍛錬する時の正装は、上半身裸なのかよ!

メイジだろうが、あんたは!……普通の杖あるのに拳で殴るのが主戦法の段階で、何も言えないか。

……さてよ?この理屈だと、同じくガントレット方の杖で殴り、ゴ
ーレムで殴る俺も……考えるのをやめよう。

「あら あなた 今日も遅しいわあ、素敵よ」

と、母さんまでいつの間にか出てきていた。

ウツトリとした表情で親父を褒めている。

いかん!、バカップルの惚気タイムが始まっちゃった!

まずいぞ……爆撃に備えないと、砂糖を吐いて死ぬ!

「はっはっは!そうだろお?やっぱミリアにはわかるよなあ!」

母さんの言葉に気をよくして笑う親父。

そのまま、ボディビルのようなポーズまで決める。

うへえ……見るに堪えん……。

「ええ、勿論！、だって……愛する旦那様ですもの！キャッ！恥ずかしい！」

と、親父の言葉に答えて、超絶に恥ずかしいセリフを言った後、

イヤンイヤン！、と体をクネらせる母さん。

うわあ……完全に始まってやがるよ……。

一話以来に言うけどさあ、母さん今年で35だぜ？

でもって、親父は37、結婚10年目だ。

なのに何なんだ？、この新婚丸出しバカップルは？！

「「愛の力だ（よ）！！」」

……二人して、心を読むなアア！！

と、こんな馬鹿をやった時、一羽の鳥が飛んできた。

そして、その鳥は親父の指に止まった。

鳥をよく見ると、足に何かがあった。それは……。

「こいつぁ……手紙か？」

どうやらこの鳥はウチの伝書鳩みたいだ。

ウチは、全ての領地内に、この伝書鳩を、育て、管理する所がある。
緊急時にいつでも連絡できるように、親父が創ったものだ。

その伝書鳩が飛んできたって事は……。

「こりゃあ……何かあったな、取り合えず手紙を見てみるか……。

そう言っつて、親父が鳩の右足に巻かれていた手紙を開く。

そして……手紙の内容を見た親父の目が見開かれた。

「何てこった……！、オーク鬼の奴ら、またあの村に攻めて来やがったのか！、しかも今度は70匹以上だと？！、冗談じゃねえ！」

「何ですって？！、本当なの？あなた……！」

母さんも顔を青くして驚いていた。

まさになんてこった……！！、前回より上の数だと？！

オーク鬼め……一体どうなってるんだ！

親父の顔は、怒りからか赤くなっていた。

当然だろう、一度ならず二度も自分の領地を攻められたんだ。

そう言っつて、ている領地の人々を家族のように思っているんだ。

そんな人々が住む村を荒されて、怒らないわけが無い！

「ああ！、本当だよ……！、奴らめ……！今度こそ、徹底的に叩いてやる！」

まるですぐにでも飛び出す勢いの親父。

だが、前の討伐で親父の部下達は大半が怪我を負ってるはず……。

どうする気だ……？親父……。

と、考えている俺に、親父は驚くべきことを言った。

「ライル！、お前も知つてるとおり……俺の部下達は前の討伐で怪我をしたやつらが多すぎて、無事な奴は2人ぐらいだ！、俺を入れたとしても3人！、70の数を相手にするのはきつい！、だから……お前もこい！」

「あなた！、それは！」

俺もオーク討伐に、か……いつか実戦に出る時が来るとは思ってたが……。

初実戦にしちやあ、規模がでか過ぎるぜ……！

だが！、俺も親父の息子！、ライル・ド・レイネストだ！

母さんは、心配してくれてるが……。

領地の人々は家族同然！行かないって選択は無い！

「ああ！、俺も親父の息子だぜ？家族の危機に、助けにいか無えって手は無い！」

俺は、力強く答える。俺の力がどこまで及ぶかは解らない。

だが、限界まで力を出し切ってやる！

「駄目よライル！、危なすぎるわ！」

母さんが、必死に俺を止めようとする。

その両目には涙が溜まり、今でも泣き出しそうだ。

本当に俺のことを心配してくれているのが、ヒシヒシと伝わってくる。

確かに危ないだろう。親父と親父の部下2人がいても、

俺含めたったの4人、70のオーク鬼を相手取るのは幾らスクエアの親父がいても、難しすぎる。

村人への被害を出さないようにしながら戦うとなると、さらに厳しい。

ひよつとすれば、死ぬかもしれない。親父は問題ない、仮にもスクエアだ、簡単に死にはしないだろう。

だが、俺は実戦に出た事の無いラインメイジ、一歩間違えれば、確実に、死ぬ。

それでも……それでも……！、俺は……！

「それでも、行かなきゃならないんだよ、母さん……」

「ライルちゃん！」

とうとう母さんの目から涙が零れる。

まったく……普段はのほほんとしてるのにねえ……。

母さんを安心させるために、最大限不敵に笑って見せる。

「大丈夫 夫だつて！、俺を誰だと思ってるんだよ、母さんと親父の息子だぜ？、

死にゃあしないさ」

俺が、そう言うと、親父も俺の意図を理解したのか豪快に笑う。

「ハハハ！そうとも！、こいつは愛するお前と俺の子だ！絶対に無事で帰ってくるさ！」

俺と親父の言葉に、母さんは元気を取り戻したのか、母さんはいつもの穏やかな笑顔を浮かべた。

うむ、やっぱり、母さんは笑ってないとなあ！

「分かったわ……でもライルちゃん？絶対無事で帰ってきてね？、約束よ！、もし怪我なんかしたら、泣いちゃうんだから！」

う……そりゃきついねえ、こりゃ怪我也できなくなっちまった。

これは責任重大すぎるぞ？俺！

「ハッハッハ！ライル！こりゃあ、マジで責任重大だぞお？アッハッハッハ！、

さて！、ソロソロいくとするか！、手紙によると部下たち2人はもう先に向かつてるらしい、

俺たちも、遅れないよう、今回は馬車じゃなく俺のランドに乗って行くぜ！こい！、ランド！」

ランドと言うのは親父の使い魔のランドドラゴンの事だ。

風竜、火竜、水竜に並ぶ地の竜で、風竜の様な飛行能力は無いものの、

圧倒的な防御力とずば抜けた脚力が生み出す圧倒的なスピードが武器だ。

こいつに乗れば、オーク鬼のいる村まで馬車で1時間の距離をわずか20分で到着できる。

前回の討伐では、数が多いってことを知らなかったから、馬車に乗っていったみたいだが、今回は事情が違う。

部下さん2人は先に向かっているらしいし、急がないと！

親父の呼び声に答え現れたランドに乗って、俺たちは村へと向かった。

背中に、母さんの声を聞きながら……。

「ライルちゃん　！、あなた　！、待ってるからね！、どうか無事で！」

ああ……！、もちろんだ！

3話、朝の惚気大爆撃と、初陣確定！（後書き）

こんにちは。

S u e r t e です。

4話、いかがでしたでしょうか。

とうとう戦闘が発生します。

スケールが無駄に大きいです。

上手く書けるか心配でなりませんw

ですが、精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。

では、読んで下さって有難うございました。

感想、アドバイスお待ちしております！

p s : お気に入りが予想以上に増えててびっくりです。

本当に有難うございます。

p s 2 : 早速修正ですo z l

4、オーク鬼たちの王、現る！

「おいおい……なんて光景だこりゃあよお……」

「オーク鬼め……荒しまくってやがる！」

親父の使い魔のランドドラゴンに乗って、連絡を受けた村の近くに到着した俺たちが見たのは、

辺り一面が派手にぶっ壊れている光景だった。

完全に壊滅状態だ。

二人とも自然と顔を歪めてしまう。

ランドドラゴンのスピードでも遅かったのか？……クソッ！

自然と怒りが高まってくる。奴らめ……許さねエ！

「だが……妙だな、オーク鬼どもは居やがるのに、村人たちの気配が無えな

血の臭いがしないところを見ると、皆殺しにされたってわけでも無さそうだが……」

と、俺が怒りを募らせていると、親父が訝しげに呟いた。

……確かに妙だな……これだけ派手にやらかしたってのに、村人たちの気配がまったくくないのは。

普通、オーク鬼達は、獲物を生かしておかないと聞く。

それは、奴らは人を食う上に残虐だからだ。じっくりじっくり嬲り殺しにして食ってしまう。

なのに血の臭いはまったくしてこない。

なら、村人達は、オーク鬼が来る前に逃げたのか？

いや、それはありえない。

うちの方に連絡が来たのは、村にオーク鬼が攻めてきた後のことだ。奴らが来る前ならともかく、いったん70匹ものオークが攻めてきた後では。

訓練を積んだ兵士や、メイジでもない限り、逃げる事はできないだろう。

なら……これは一体どういうことだ？

まさか奴らが、村人達を攻撃しなかった？

そんなことがありえるのか……？

と、俺が悩んでいると、前方から、人の声とは思えない声が聞こえてきた。

突然の声にさすし驚き、声のする方にめを向けると

そこにいたのは……。

「オオオ！、コノアイダノ、ニンゲン、キタ！、ボスノ、イッタコト、ホントウダッタ！」

「コンド、ハ、シラナイ、ニンゲン、モ、イル！」

「なんだあ？！、てめえらはよ！、ってオーク鬼が喋ってやがるだとお？！」

「おいおい、マジかよ！どんな突然変異だよ！」

「あ、あいつらは！、この前のやつらだな、だがそのときは喋らなかったんだがな？」

なんと、喋るオーク鬼の集団だった。

おいおい、なんなんだよ一体！

聞いてねえぞ！、こんな当然変異がいるってのは！

流石の親父もこれには驚いたのか、目を見開いて叫んでいた。
勿論、俺も物凄く驚いた。

約5匹ぐらいの奴らは、俺たちに近づいてきた。

予想外の事態に戸惑ってしまった俺たちは、その接近を許してしま
った。

喋るオーク鬼をみて驚かない奴かいたら出てこいって……。

そして、その中で一番でかい奴(約220CMぐらいか?、他の奴
らは200CMぐらいだった。)が。

俺たちに、正確には親父に言った。

その内容は……。

本当に、予想外の物だった。

「オマエ、コノ、アイダ、ノ、ニンゲン!、オレタチ、ノ、ボスガ
オマエ、ニ、アイタガツテル!
ツイテコイ!」

なんと、奴らの頭が、親父に会いたがつてるらしい。

親父……一体何をしたんだ?

喋るオークのボスが会いたがつてるなんて。

「……ハハッ!、クツハハハハ!、なんだなんだあ?、喋るオ
ク鬼のボスが、
俺に会いたがつてたあ!……いいゼエ? テメエらにゃあ、聞
きたい事がたんまりとあるんだよ!」

親父は、いつものように豪快に笑ってその誘いを受けた。

親父……畏って可能性は考えてないんだろうなあ……。

まあ、仕方ないか、親父だし。

それに、俺も奴らには聞かなきゃいけねえ事がある！

「おい、オーク野郎！、俺も行かせてもらっぜ？、俺は、お前らのボスが会いたがつてるこの男の息子だ、行く権利はあるだろう？」

そうっ言つて、俺も奴らに笑つてみせる。

親父一人で行かせるわけには、いかねエさ！
すると奴はニヤリと笑った。

「ホウ！イイダロウ！、ヨクミレバ、オマエ、モ、ナカナカツヨソ
ウダ

オマエモ、ボスニアワセタラ、ヨロコブダロウ！、ツイテコイ
タダシ、ソノトカゲカラハ、オリテモラウゾ」

おーおー！、話が分かるやつだねえ。
それじゃあ、行つて見るか！
村を荒した、礼をしないとなあ！

「気をつけるよあ？、こいつら、結構強いぜエ？
ボス級となりゃあ、もつと強いだろうよ」

親父が、俺に耳打ちしてくる。
ハ！、生半可な奴に負けられるか！
少なくとも、親父ぐらゐは強くないとねえ。

そう言つと、親父は、
「ハッハッハ！、それでこそ俺の息子！」
と、笑った。

「コノヒロバデ、ボスガマツテイル！」

奴らに連れられてやってきたのは、この村の広場だった。どういづつもりだ？、態々待つなんて……。

考えても仕方が無いので、言われるまま広場に入った。

そこにいたのは、大勢のオーク鬼達だった。

ざっと見ても65匹はいる。

俺たちをここまで連れてきた奴らを合わせると、丁度70匹だ。

そして、その中で、一際異彩を放つ奴がいた。

残りの69匹のオーク鬼に守られる様に真ん中に立っていたそいつは、

他のオーク鬼と比べて小さかった。

俺のゴーレムと同じぐらいかそれより少し大きい。

そのぐらいの大きさだった。

だが、そいつは、他のオーク鬼とは違う雰囲気を持っていた。

まず、その肉体だ。

他のオーク鬼より小さいのに、奴の肉体は、他のどんな奴よりも鍛え抜かれていた。

下半身に布を巻いただけの露出された筋肉は、端切れんばかりで、背が小さいだけで、奴の体のパーツ一つ一つは、どんなオーク鬼よりもデカかった。

次に、その顔。

他のオークたちと違って、奴は豚っ鼻じゃなく、人間のような鼻を持っていたんだ。

その異常な体と、口からはみ出てる、鋭い牙が無ければ、オーク鬼

だと分からなかっただろう。

そして、何よりも大きな違いは、

奴の喋る言葉は、他の奴らと違って、カタコトじゃなく、完璧な人の言葉だったという事。

「よくぞ、よくぞ来られた、強き者よ！、我こそこのオーク鬼達に従える王！、スルカだ！」

奴は俺たちを見ると、気迫のこもった声で歓迎の意を表した。

低音のその声は、覇気が込められていて、こいつがオーク鬼達のボスであると、

納得させるだけの威力があった。

「よお！、ずいぶん歓迎してくれるじゃあねえか！、お前さんがこのボスだな？って、

もう自分で言っただけか？ハハハ！」

それを聞いて親父が笑いながら軽口を飛ばす。

奴の気迫にまったく押されていない。

まるで、古くからの友人に話してるようだぜ。

土のスクエアは、伊達じゃないって事か。

「ハハハ！、そうだ！、もう一度言おう！オーク鬼の王、スルカだ、強き者よ！」

親父の言葉に答える奴は、笑っていた。

強い奴と会えて、うれしくて堪らない！

そんな表情だ。

こいつも、親父と同類かも知れん。

所謂、バトルジャンキーって奴だ。

「む？、おお！知らぬ顔がいるな！、強き者よ、貴公の息子か？、父に劣らず、

強さを感じるぞ！、歓迎しよう！、もう一人の強き者よ！」

お、今度は俺かい！

奴は俺を見ると、親父のときみたいに笑った。

どうやら、俺も一目置かれたらしい。

あんな強そうな奴に褒められたんだ。

悪い気はしないねえ！

「ああ、確かに、こいつは俺の自慢の息子さ、名前はライルだ、そして俺の名はグランツ！

強き者なんて呼ばねえで、名前で呼びやがれ、名前で！」

と、奴の言葉に親父が言う。

確かに、いつまでも強き者とか呼ばれるのはねえ……。

親父がそう言くと、奴は再び笑って言った。

「うむ！、グランツにライルよ！、その名、しかと覚えた！」

なんだか、オーク鬼とは思えない奴だぜ。

こいつ、もしかして、いい奴か？

いや、まだわからねえか。

「で、スルカさんよお、どうして俺の領地を襲って、しかも、俺に会いたがってたのか、説明してくれるか？、場合によっちゃあ、ここで、戦う事になるかも知れねえからなあ！」

親父が、真剣な表情で言う。

確かに、まずはその理由を聞かないと始まらない。

何故襲ってきたか、そして、何故態々呼んだのかを、だ。

親父の言葉に、奴も真剣な顔で語り始めた。

「うむ、まずは、貴公の領地を荒し、敗れたにもかかわらず、再び攻め入った事を深く詫びさせて頂きたい！
本当に申し訳ない、だが私にも理由があるのだ」

奴は、そう言つと頭を下げた。

おいおい！、こんなオーク鬼見たこと無いぞ？
どうなってるんだ……？

「おいおい、頭を上げてくれよ、こっちが困つちまうじゃねえか」

親父も驚いたらしい。

流石に親父も、人間に頭を下げるオーク鬼なんて、見たこと無かつたようだ。

スルカは、感謝する、と言つて頭を上げると、また語りだした。

「私は元々、群れから離れ放浪をしていたのだ、私は群れの仲間達に比べ、この通り小さくてな、だが、それと引き換えに、人間の頭脳を手に入れることができた」

「だが、オーク鬼の社会と言う物は、そんな知能よりも大きさと力こそが全てだった、
だから私は、仲間達からは落ちこぼれ扱いを受け、群れから追放された」

なるほどな……。

確かに、オーク鬼達には、

頭のよさなんて何の価値も無いだろうな。

「幸い、私は体こそ小さい物の、力はむしろオーク鬼より強かったし、

知能もあつた、だから、放浪の途中で出会った別のオーク鬼達と戦い、

私の群れを作っていったのだ」

凄い奴だよ……。

ここまで集めるのに、一体幾ら戦つたんだ？

それに、こいつら、強い、間違いない。

そして、そんな強い奴らを従えるこいつは、間違いなくオーク鬼最強だろう

「そして気がつけば70のオーク鬼の群れとなつたわけだが、そうになると当然、食べる物が必要になってくる、沢山の食料がな！」

だろうな、これだけのオーク鬼達が食う量は、ちよつとやそつとじゃ、満たせない。

そして、その量は、狩や採取では達成できない。

そうなつてしまったら……。

「だが悲しいが、我々だけで調達できる食料は限りがあつた、そこで私は人間達に狩で得た肉や毛皮を売り、それで得た金で食糧を買つたのだ

幸い、この牙を除けば人間と近い外見だつた私にはそれができた」

「だが、それも長くは続かなかつた、ふとした事故で、私がオークだと知られてしまったのだ

そのうわさはすぐに、村全体に広がり、
もはや、食料を得る手段は狩だけとなってしまった」

そう言うスルカの顔は悲しみに満ちていた。

「噂とは早い物で、瞬く間に私がオークだと周囲の村に知られてしまったのだ

これでは、仲間達が飢えてしまう

やむを得ず、私たちは、略奪に手を出した

悪い事だと知っていても、だ

もう、後は無かった」

「そんな中ターゲットになったのが、そう、貴公の領地だったのだ
だが、仲間達は敗れた、グランツ、貴公によって！

本当なら、一度でも、誰かに敗れたならば、略奪はやめるつもりだった

だが、仲間達に貴公の報告を聞き、私は考えたのだ

魔法を使う物なのに、魔法を使わず己の肉体のみで仲間達を圧倒し
たと聞いたとき、

思ったのだ！

この者になら、頼めるかも知れぬと！」

スルカの言葉は熱を帯びていた。

それは、仲間達を想う、

執念が詰まっているようだ。

そして……スルカは言った。

「貴公を男と見込んで、お頼み申し上げます！

ここで、私と戦い私が勝てば……食料を分けていただきたい！

仲間達が、飢えない食料を！」

4 オーク鬼たちの王、現る！（後書き）

こんにちは。

S u e r t e です。

4話、如何だったでしょうか。

今回、最大のオリ設定が出ました。

そしてまたも、戦闘が有りませんw

まじすみません・・・次は必ず・・・

では、読んで下さって有難うございました。

後、感想待ってますww絶実ですw

ではまたー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419s/>

流れ流れ、咆える！

2011年10月7日13時28分発行